ボランティア

女性教育情報センターだより

2024.6.14　発行 国立女性教育会館情報ボランティア　No.99

特集　お産の歴史を考える

女性にとって出産とは－自然の生理？医療？

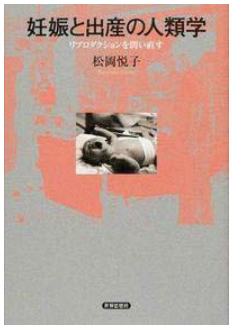
NWEC 女性アーカイブセンターでは「お産の歴史展」を開催し、明治時代以降の出産・助産、家族計画に関する資料、器材などや、お産の現在を伝える「100人のお産プロジェクト」の写真を展示している（9月23日まで）。

女性教育情報センターのテーマ展示もこれに合わせ、「出産の歴史」をとりあげた。古代からの出産の歴史、各地の出産習俗、助産、自然分娩、家族計画など、出産に関する幅広い資料を紹介している（6月30日まで）。

二つの展示を通して、多様な出産のあり方や歴史を知り、安心して出産できる社会づくりを考える一助としたい。

資料紹介

『妊娠と出産の人類学
―リプロダクションを問い直す―』
松岡悦子著　世界思想社　2014



著者が妊娠・出産を研究テーマに決めたのは自らの妊娠がきっかけだったという。世界各地の出産をめぐる歴史や習俗など豊富なフィールドワークから、女性にとって望ましい妊娠や出産がどのようなものかが浮かびあがってくる。

著者は二〇二四年度南方熊楠賞受賞

昭和初期のお産に使われた道具や産着などの実物があります。ビデオ上映もやってますよ。

テーマ展示のレイアウト
作業を行うボランティア

アーカイブセンターの展示風景

赤ちゃんの誕生――家族にはとてもうれしいことだ。

しかし、100 年前までは、お産は女性にとっても赤ちゃんにとっても命がけだった。現在、日本のお産は世界でも有数の安全性を誇っている。このような歴史を振り返り、現在のお産が直面している課題についても考えてみたい※。

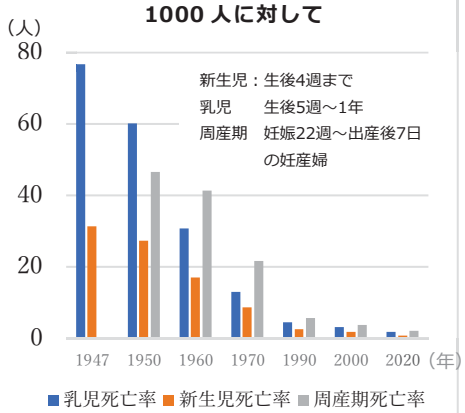
日本のお産の歴史は三つの時代に分けられるという。以下、明治以降に焦点を絞って概観してみよう。

※この項は、時代区分を含めて以下の文献・資料を参考にしました。
・松岡悦子「妊娠と出産の人類学―リプロダクションを問い直す―」(資料紹介参照)
・堀内成子「急性期医療等の観点―助産師の立場から」厚労省　看護基礎教育のあり方に関する懇談会資料　(2008.3.24)　https://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/dl/s0324-14m.pdf

本号の内容

・特集：お産の歴史を考える
・NWEC フォーラム 2023 出展報告
　<多世代ワールドカフェ ver.2>
・高校生のアクション紹介

図 1 乳児・新生児・周産期死亡率の推移
1000 人に対して

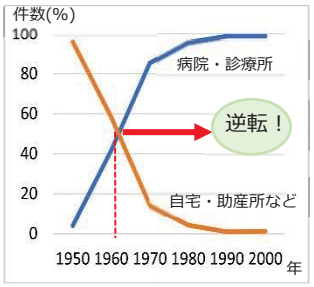


厚労省：「令和４年 人口動態統計(確定数)の概況」
第２表－２人口動態総覧(率)の年次推移をもとに作成
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei22/dl/15_all.pdf

1．自宅出産の時代

転換期は1960年代

図２ 自宅出産と施設出産の逆転



厚労省 第９回「医療安全の確保に向けた保健師助産師看護師法等のあり方に関する検討会(2005年)資料をもとに作成
https://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/09/s0905-7f.html

お産は自然の出来事とされ、妊婦は直前まで働き、地域の助け合いによって出産した 。赤ちゃんの誕生は地域共同体全体の祝い事であった。

その一方で、「七歳までは神のうち」という言葉があったように、生まれた子どもの10人に１人が1年以内に亡くなり、妊産婦の死亡率も高かった[※1]。

※1 厚労省：令和４年「人口動態統計(確定数)の概況」 第２表-２人口動態総覧(率)の年次推移によれば1947年新児・乳児死亡率は1000人に対し108.1、周産期死亡率は46.6(1950年；それ以前はデータなし） URL は表1参照

2．出産の医療化

高度経済成長の中で男性働き手と専業主婦を基本とする「近代家族」が成立する。

出産は「私事」となり、地域のつながりは薄れた。医療施設での出産が増え、女性は＜患者＞とされ、病院や医師が出産の主体となる。その都合に合わせた分娩時期のの調整(休日や深夜の出産が激減)が行われるようになったことを示すデータもある[※2]。

また帝王切開が急増し（2014年には5人に1人、20年前の約2倍）、それにより心の傷を受ける女性も増えているという。

産後のストレスを共同体の女性たちに支えられて乗り越えることもできなくなった。

1980年代にはマタニティ・ブルーという言葉が広まっていく。

コラム　日本最初の帝王切開手術はここ埼玉で行われた！

時は幕末の1852年。飯能の農民本橋常七の妻みとが産気づいた。難産をきわめ、医師の岡部均平が対処したが胎児は死亡、母体も危険な状態であった。岡部は同門の医学塾の先輩、伊古田純道に助けを求めた。伊古田の住む秩父は急峻な正丸峠を越えて約16キロの道のりである。駆けつけた伊古田は母親の命を助けるためには帝王切開をして胎児を取り出す以外にないと決断し、持参した『撒羅満（サロマン）氏産論鈔※』を参考に岡部とともに手術を決行。麻酔も無しに行われた手術は困難を極めたが、みとはよく耐えた。術後、合併症に悩まされたが、伊古田は秩父と飯能を往復して懸命に治療にあたり、ついに57日目に全快を告げた。

のちに伊古田は感慨をこめて「西洋医学の賜」と述懐している。その後、みとは長生きし、1908年、88歳で天寿を全うした。

※オランダの医学者ゴットリープ・サロモンが1825年に出版した産科の医学書を翻訳したもの

本橋家敷地内に建つ記念碑
写真提供　飯能市教育委員会

参考 ・芝山富義著『みとは耐えた－日本最初の帝王切開手術』冴企画 2013
・桜沢一昭著「孤高の蘭医伊古田純道」『草の根の維新』所収、埼玉新聞社 1982
・「江戸期に日本初帝王切開：飯能で医師二人母体救う」 毎日新聞 2018.9.18

3．自然出産見直しの動き

折から盛んになっていた第二波フェミニズムの影響もあり、性や生殖の問題は「私事」ではなく、家父長制などの社会構造と直結しいるとの考え方から、出産を医療の枠組から解放して女性自身の手に取り戻そうとする運動が起こる。「ラマーズ法」などの「自然なお産運動」である。また助産師の役割の重要性も再認識されるようになった。

4．出産の現在

一方、社会情勢の変化は出産をめぐる困難も増大させた。貧困や社会的孤立などから、十分なケアを受けられず孤立出産や子ども虐待に陥る女性、また、育児や教育の負担に対する不安から出産を躊躇する女性もおり、出産が女性を取り巻く社会状況と密接な関わりを持つことを示している。

※2 厚生労働省大臣官房統計情報部:出生曜日・時間別にみた出生　https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/syussyo-4/syussyo3-7.html

女性中心のマタニティ・ケアを目指して

女性が、**どこで**産むか、**誰と**産むか、**どのように**産むかを自ら選択でき、十分なケアを受けることができること、これが出産する女性にとっての真のリプロダクティブ・ヘルス／ライツであろう。近年、できるだけ普段の生活に近い状態でゆったりと過ごし、自然分娩をめざすバースセンターも、自治体、病院、助産所など各方面で開設されるようになってきた。一方、不妊治療、出生前診断、匿名出産など、出産をめぐる課題も山積している。妊娠、出産、産後のケアを、当事者である女性を中心に、パートナーをはじめ、地域や社会全体で支える社会の実現を目指したい。

[yk]　写真[af][yh]

高校生が大活躍！

多世代ワールドカフェ ver.2:
若い世代と共に考えるジェンダー課題「性の多様性」

オンライン開催３年目となったフォーラム 2023 において、NWEC ボランティアの会は、近年力を入れている近隣の高校生との交流を一歩前進させ、高校生とのコラボによるワークショップを実施した。主役は筑波大学附属坂戸高校（埼玉県坂戸市）、当時２年生のメンバーから成る２つのチーム＜Petunia（ペチュニア）＞と＜liefde（リーフデ）＞の皆さん。

各チームは、総合的な探究活動であるT-GAP（Tsukusaka Global Action Program）で取り組んだジェンダー課題について、まず、パワポを使ってプレゼンした。次に、メンバーが、北海道から九州まで各地から集まった20～80代の参加者ら計30名を3～4名の小グループに分けての対話で進行役を務めた。高校生が提示した、正しい知識や理解の不足がもたらす偏見・生きづらさ、そしてそれらをなくしていくためのアクション（学校での性教育やパートナーシップ制度導入など）について極めて活発な意見交換が行われた。 [af]

▷Petunia

▷liefde

２つのチームの活動については 前号（98 号）で取材
⇒ https://nwec.repo.nii.ac.jp/records/2000083

～ワークショップ終了後の感想より～

高校生

・幅広い世代の方の経験を直接聞くことができ、貴重な体験だった
・自分にはない価値観や考えに触れ、とても楽しかった
・いろいろな世代や地域の方と話ができ充実した時間だった

大人の参加者

・若い人の行動力・発信力に感服、勇気を貰った
・小学校の教師を志望→授業で活かしたい
・各々の価値観を尊重することの大切さを学んだ
・様々な視点からの意見交換は楽しかった
・多世代の方々との交流から気づきが多くあった

☆ファシリテーターとして協力してくださったNWEC客員研究員・高橋由紀さんより

多世代ワールドカフェは、Petunia、liefdeの皆さんに参画いただいたことで、実り多い学びの機会となりました。打ち合わせ、リハーサル、本番と両チームのプレゼンテーションの質は高まり、若い世代のスピード感に心地よく乗りながらファシリテーションさせていただきました。NWECボランティアの皆様の着眼点がすぐれており、男女共同参画推進フォーラムにふさわしい企画だったと思います。

liefde が近隣の未導入自治体に導入を働きかけたパートナーシップ制度：埼玉県の状況
2024年４月12日、県内63市町村のうち、同制度を導入済みの62市町村が連携協定を締結した。同年6月13日、残る川口市も同制度導入の旨を表明し、県内全市町村での導入が実現することになった。
[出典：2024年４月13日、6月14日 埼玉新聞、朝日新聞朝刊ほか]

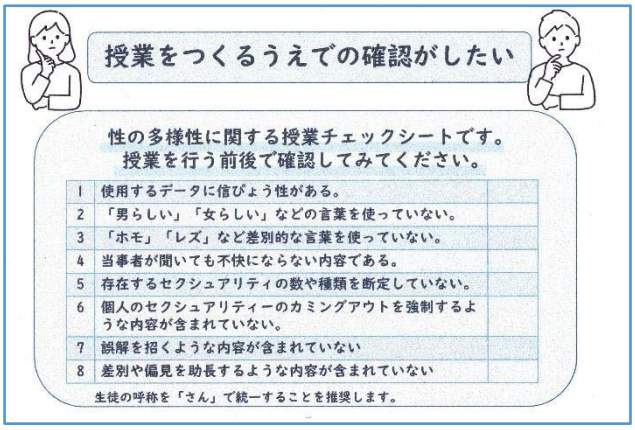
さらなる！

高校生のアクション紹介

～性の多様性、ジェンダー平等の理解促進のために～

前号 98 号、ならびに今号の 3 ページでも取り上げた、筑波大学附属坂戸高校の 2 つのチーム＜Petunia（ペチュニア）＞と＜liefde（リーフデ）＞は、その後も活動を発展させ、Petunia は「性の多様性と次世代の価値観～教育シート～」を、liefde は「中学生版　坂戸市男女共同参画啓発リーフレット*：いっしょに歩もう女（ひと）と男（ひと）」を作成した。両チームとも、課題解決に向けたアクションのひとつとして、情報発信のためのツールを印刷物として完成させたのである。

*リーフレットは市の HP に掲載　https://www.city.sakado.lg.jp/soshiki/12/24152.html



授業をつくるうえでの確認がしたい

性の多様性に関する授業チェックシートです。
授業を行う前後で確認してみてください。

1	使用するデータに信ぴょう性がある。	
2	「男らしい」「女らしい」などの言葉を使っていない。	
3	「ホモ」「レズ」など差別的な言葉を使っていない。	
4	当事者が聞いても不快にならない内容である。	
5	存在するセクシュアリティの数や種類を断定していない。	
6	個人のセクシュアリティーのカミングアウトを強制するような内容が含まれていない。	
7	誤解を招くような内容が含まれていない	
8	差別や偏見を助長するような内容が含まれていない	

生徒の呼称を「さん」で統一することを推奨します。

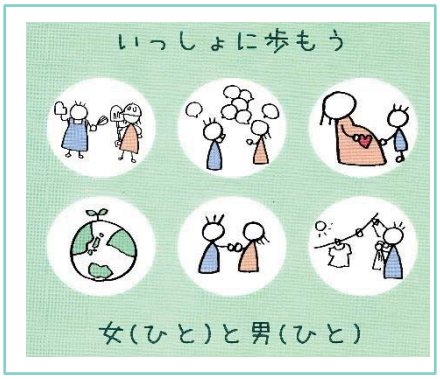
Petunia の「教育シート」は、性の多様性の正しい理解促進に有効な“学校での性教育”を広めるための教師向けの資料だ。これにより、教える側の知識不足や関心の低さを補ってもらえることを狙いとする。高校生の生の声や、悩みごとへの対処方法、日ごろ気を付けることなども掲載されている。「教育シート」は坂戸市勤労女性センター*で閲覧可能となっている。

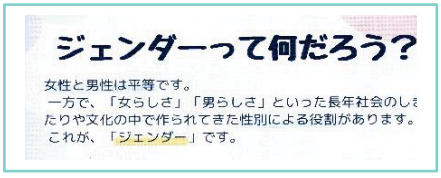
[左は本文全 8 枚の 4 枚目]

＊https://winet.nwec.go.jp/sisetu/summary/search/detail.html?pdid=2061

liefdeのリーフレットは、坂戸市人権推進課から、それまでの版を刷新する目的で制作を働きかけられ、同課と共同で作り上げたものだ。

6月23日からの「男女共同参画週間」に向けて、市内の中学一年生に配布されることになっている。対象が中学生であることを強く意識し、色調やフォントは見やすいものを選び、文字は少なく、代わりにイラストを多用するなど各所に工夫が凝らされている。表現もわかりやすいものとなるよう熟慮したとのことだ。





ジェンダーって何だろう？

女性と男性は平等です。
一方で、「女らしさ」「男らしさ」といった長年社会のしきたりや文化の中で作られてきた性別による役割があります。
これが、「ジェンダー」です。

グループでの取り組みだからこそ、様々な考えを出し合い、より深い学びにつながるのだと思います。今回の経験は今後の人生の糧になりますね。(学校での)授業やプライベートな活動で忙しい中、若い感性を活かしたものができたことに感謝します。

高校生の相談相手を務めた坂戸市勤労女性センター所長　佐藤志穂さんのコメント

坂戸市イメージキャラクターさかろん

謝辞：筑波大学附属坂戸高校の<Petunia>と <liefde>の皆さま、そして同校の先生方のご協力に心より感謝いたします。取材や フォーラムコラボ企画を通じての生徒の皆さまとの交流は、刺激に満ちた楽しい経験でした。ありがとうございました。[af]

ボランティアの本間喜美さんが、令和５年度文部科学省社会教育功労者表彰を受彰～ボランティアの会より花束を贈呈した

＜編集後記＞　・初夏の NWEC は美しい。日本庭園を散策して茶室でお茶、なんて最高。[yk]　・少子化対策だけでなく、SRHR の視点からの妊娠、出産への支援が求められる。[yh]　・今の若い妊婦さんはスマート。10～13kg 増は許容範囲。適正体重で元気な赤ちゃんを[to]　・森林公園駅（嵐山の隣り）では今年も駅員さんや利用客に見守られツバメの家族が子育て中 [af]